

第49回日本神経精神薬理学会
プログラム

特別講演

特別講演

10月13日(日) 13:40 ~ 14:40 第13会場(501)

座長：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

SL

Genetics of Tobacco Smoking

Edward F. Domino Department of Pharmacology, University of Michigan, USA

精神科専門薬剤師精神医学セミナー

精神科専門薬剤師精神医学セミナー

10月13日(日) 10:10～12:10 第11会場(502)

精神科薬物療法における精神科専門薬剤師の役割

The role of Psychiatric Pharmacy Specialist in psychopharmacotherapy

オーガナイザー・座長：吉尾 隆 東邦大学薬学部臨床薬学研究室
座長：天正 雅美 社会医療法人北斗会さわ病院

日本病院薬剤師会による精神科専門薬剤師認定制度が開始されて12年が経過している。この間に精神科専門薬剤師の認定を受けた薬剤師は、全国で約50名となっている。また、精神科領域における薬物治療の適正化を目的として、2016年には一般社団法人日本精神薬学会が設立され、認定薬剤師制度を運営している。精神科専門薬剤師の役割は、精神科薬物治療における処方支援と処方設計及び治療管理であるが、日々の臨床現場において実際にどのように機能し、その役割が患者、医療従事者に認知されているのかについては、これまで検証されてきていない。そこで、今回のセミナーでは、3名の精神科専門薬剤師から、日常業務で行っている処方支援・処方設計の成功例・失敗例等を紹介していただく。また、指定発言として、精神科専門医から現状での問題点の指摘と今後への期待について意見を頂き、精神科薬物治療における精神科専門薬剤師の役割について議論を深めたい。

PS-1 精神科病院薬剤師の臨床における役割

谷藤 弘淳 こだまホスピタル薬剤部

PS-2 精神科専門薬剤師によるより良い薬物療法と意思決定のためのエビデンスに基づいた処方提案

桑原 秀徳 医療法人せのがわ瀬野川病院薬剤課

PS-3 適切な薬物療法を支援するための精神科専門薬剤師の役割

柴田 木綿 八幡厚生病院薬剤課

指定発言 稲垣 中 青山学院大学教育人間科学部 / 青山学院大学保健管理センター

JSNP

精神科専門薬剤師
精神医学セミナー

シンポジウム

シンポジウム1

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第4会場(409)

ノルアドレナリン神経の多様な機能と関連する病態生理

Diverse physiological and pathophysiological roles in noradrenergic neurons

オーガナイザー・座長：戸田 重誠

昭和大学医学部精神医学講座/金沢大学医学部精神行動科学

座長：南本 敬史

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部

ノルアドレナリンは、ドパミン、セロトニンと並ぶ重要なneuromodulatorである。その重要性は古くから認識されていたにも関わらず、他の神経伝達物質に比べると研究は十分進んでいるとは言えない。これまで、ノルアドレナリンが注意や覚醒に重要であることは知られていたが、それ以外にも、例えば作業記憶や情動に関する記憶、探索行動、困難を乗り越えるための意欲(エネルギー)といった様々な機能に関係すること、さらにうつ病や注意欠陥多動性障害などの精神疾患に関与することもわかってきた。本シンポジウムでは、このようなノルアドレナリン、およびその起始核である青斑核の多様な機能に関して、げっ歯類・サル・ヒトの最新の知見を紹介する。

S1-1

What is the role of the LC/NA system in effort processing?

Sebastien Bouret

CNRS/ ICM

S1-2

Clonidineにより明らかとなったノルアドレナリンによる意思決定中の海馬情報検索の調節

雨宮誠一郎

University of Minnesota, Department of Neuroscience /

理化学研究所脳神経科学研究センター / 首都大学東京人間健康科学研究科

S1-3

青斑核ノルアドレナリンニューロンの活動亢進は学習された情動記憶の想起を促進する

井口 善生

福島県立医科大学学生体機能研究部門

S1-4

ADHD成人における非定型なアラートニング制御：瞳孔径計測による検討

白間 綾

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部 /

昭和大学発達障害医療研究所

JSNP

シン
ポ
ジ
ウ
ム

あなたの知らない"製薬企業の創薬研究"

"Development of new drugs in pharmaceutical industry" you do not know

オーガナイザー・座長：橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター
 オーガナイザー：茶木 茂之 大正製薬株式会社医薬研究本部
 座長：岸本泰士郎 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

中枢神経系の薬剤開発の失敗率が非常に高いことから、海外の大手製薬企業は中枢神経薬の開発から撤退するかあるいは規模を縮小する傾向がある。一方、わが国の製薬企業は中枢神経薬の開発から撤退せず、地道に研究開発を進めているのは喜ばしいことである。新薬を開発するには、研究テーマの起案に始まり、多くの候補化合物の合成と薬理・薬物動態・安全性評価、さらには絞られた化合物についてのGLP試験などの多くの試験が必要である。今回、国内製薬企業で臨床試験を実施している候補化合物について、創薬研究から開発研究の戦略を説明して頂き、アカデミアや製薬企業の若手研究者に今後の創薬・開発研究のヒントを与えることを目的としている。近年、AMEDもアカデミアの研究者に対して創薬支援事業を展開しているが、アカデミアの研究者にとっても、創薬研究、臨床試験開始に際してのハードルおよび臨床試験の課題について知ることは重要である。今回のシンポジウムで、アカデミアの研究者にも創薬研究の流れを勉強して頂くことも本シンポジウムの狙いである。本シンポジウムの指定討論者には、抗精神病薬アリピプラゾールの開発者である菊池哲朗博士(大塚製薬)と若手のアカデミア研究者の吾郷由希夫先生(大阪大学)をお願いした。

S2-1 グループⅡ代謝型グルタミン酸受容体作動薬TS-134の研究開発

吉田 茂 大正製薬株式会社医薬開発本部開発企画部

S2-2 アゴニスト作用の低い新規AMPA型グルタミン酸受容体増強薬TAK-137とTAK-653の抗うつ薬様作用の検証

木村 温英 武田薬品工業株式会社 リサーチ ニューロサイエンス創薬ユニット

S2-3 抗精神病薬ブロナンセリンの研究開発

馬場 聡子 大日本住友製薬株式会社

指定討論者 菊池 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部新薬研究部門

指定討論者 吾郷由希夫 大阪大学 大学院薬学研究科薬剤学分野

情動の神経機構とその異常としての精神疾患病態の解明

Neural mechanisms of emotion and its dysfunctions in psychiatric disorders

オーガナイザー：村井 俊哉 京都大学大学院医学研究科・精神医学
 オーガナイザー・座長：小川 正晃 京都大学医学研究科メディカルイノベーションセンター
 座長：雨森 賢一 京都大学 白眉センター・霊長類研究所

本シンポジウムは、不安や意欲、価値判断の意思決定の神経機構と、その異常が関わる不安障害、うつ病、強迫性障害などの精神疾患病態の解明を目指した研究の発表を行う。げっ歯類、サル、ヒトにおいて、分子生物学、電気生理学、イメージング、計算モデルといった、種の特徴を活かした最先端の研究を行う4名が登壇する。

1.名古屋大学の竹本は、新規分子マーカーを活用した、不安行動における扁桃体神経回路機能(マウス)、2.京都大学の小川は、光遺伝学による、不確実な報酬に対する意欲に関わる前頭前野・中脳ドーパミン細胞機能(マウス・ラット)、3.京都大学の雨森は、多領域神経活動記録・回路操作や計算モデルによる、不安障害やうつ病に関わる帯状回皮質・線条体機能(サル)、4.ATRの田中は、fMRIによる全脳機能イメージング・計算モデルによる、強迫性障害やADHD患者の意思決定などの脳機構(ヒト)に関する発表を行う。

S3-1 扁桃体延長部分マーカーを手掛かりとした情動制御機構の解明

竹本 さやか 名古屋大学環境医学研究所神経系分野

S3-2 意思決定における眼窩前頭皮質の役割

小川 正晃 京都大学医学研究科メディカルイノベーションセンター

S3-3 接近回避葛藤下の意思決定を制御する前帯状皮質膝前部-ストリオソーム回路

雨森 賢一 京都大学白眉センター・霊長類研究所

S3-4 仮説ベース/仮説フリーアプローチによる精神疾患の脳機構解明

田中 沙織 ATR脳情報通信総合研究所

統合失調症を再考する

To reconsider schizophrenia

オーガナイザー・座長：菊地 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部
座長：石郷岡 純 CNS薬理研究所

統合失調症治療薬について、ドパミン関連以外の創薬研究開発(グルタミン酸関連など)が進められていましたが、残念ながらことごとく失敗しています。そして、統合失調症にはまだ解決できていないアンメット・メディカル・ニーズが多数あります。このシンポジウムでは、アカデミアおよび製薬メーカーから専門の先生方をお招きし、①統合失調症のアンメット・メディカル・ニーズ、②統合失調症治療薬の研究開発の動向、および③今後の治療展望について議論を深めたいと思います。そして、シンポジウムに参加している若い研究者の方々が何らかの気づきを得ていただけるような本音で語るシンポジウムにしたいと考えております。

S4-1 統合失調症のアンメット・ニーズと新薬への期待

大森 哲郎 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野

S4-2 ドパミンD2受容体部分アゴニスト系抗精神病薬の薬理学的特性

菊地 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部新薬研究部門

S4-3 ドパミンD2受容体に作用しない新規抗精神病薬SEP-363856の開発

藪内 一輝 大日本住友製薬株式会社開発本部

S4-4 抗精神病薬の基礎薬理・これまでと最近の知見

押淵 英弘 東京女子医科大学医学部精神医学講座

精神疾患の早期介入に向けた治療法の開発；げっ歯類、霊長類、ヒトにおけるエビデンス
 Development of therapeutics for early intervention in psychiatric disorders; Evidence from rodents,
 primates, and humans

オーガナイザー・座長：住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部
 座長：牧之段 学 奈良県立医科大学医学部精神医学講座

精神科疾患の早期介入法の開発が注目されている。同分野のブレーク・スルー得るためには、げっ歯類、霊長類、ヒトを用いたトランスレーショナル・リサーチの知見に基づく、精神病、気分障害、発達障害などの発症メカニズムの解明や、モデル動物を用いた“予防薬”の吟味が待たれる。本シンポジウムでは、それぞれの階層の個体における神経細胞やグリアをターゲットとした最近の研究の動向を各演者に紹介いただき、主要な精神疾患の早期介入に資する治療法開発の方向性について洞察を得る。

S5-1 動物モデルからみた愛着障害と自閉スペクトラム症の脳回路異常

牧之段 学 奈良県立医科大学医学部精神医学講座

S5-2 統合失調症と霊長類の前頭連合野について

松元まどか 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

S5-3 ヒトにおける精神病の早期介入・予防法開発の現状

住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

発達期ストレス曝露による神経精神障害と治療戦略の考究

Study of treatment strategy on disruption of neuro-psycho-brain function by developmental stress

オーガナイザー・座長：武田 弘志 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野
徳山 尚吾 神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室

精神神経疾患は先天的な遺伝的要因のみならず、後天的な環境要因が加わって発症する多因子疾患であり、胎生期から思春期に渡る発達期を通じた生物学的環境因子の精神および神経機能に及ぼす影響が注目される。これらのことから、精神神経疾患を対象にする病態研究や創薬研究において、遺伝的要因からの解析に加え、様々な環境的要因やストレスの視点からのアプローチも必要であり、それらの影響を動物レベルでモデル化し、その分子基盤を考究することが重要である。そこで、胎生期・幼少期・思春期の各ステージにおけるストレス曝露モデルを用い、その精神・神経機能について精力的に研究されている4グループに講演を依頼し、内諾を得た。本シンポジウムでは、発達期ストレスの精神神経学的脆弱性の病態生理機構のみならず、その治療戦略にもフォーカスを当て、発達期ストレスを包括的に議論したい。

S6-1 胎生期ストレスが惹起する精神的脆弱性の分子基盤の解明と抑肝散の応用

宮川 和也 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野

S6-2 幼若期ストレスによる成長後の情動行動異常

山口 拓 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室

S6-3 環境要因による精神機能異常におけるセロトニン神経系のエピジェネティクス

荒木 良太 摂南大学薬学部複合薬物解析学研究室

S6-4 疼痛制御機構の変容における幼少期ストレス負荷の影響

徳山 尚吾 神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室

大麻成分の臨床応用と有害作用：最近の基礎研究から

Clinical applications and adverse effects of components of cannabis: current status of basic science researches

オーガナイザー・座長：船田 正彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
三島 健一 福岡大学薬学部生体機能制御学教室

わが国では大麻は厳しい規制が施されているが、海外では医療への応用、嗜好品として使用を認める国が存在しているのが現状である。また、海外では大麻含有成分であるカンナビジオールを主成分とした医薬品が承認されるに至り、大麻規制の在り方に関しては、国連においても熱い議論が交わされている。本シンポジウムでは、大麻について、(1)その植物としての特性、国内外の規制状況の比較、大麻および大麻含有成分の適切な取り扱いについて情報提供を行う。(2)基礎研究の領域からは、大麻および大麻含有成分について医薬品としての可能性について、その現状を詳解する。一方、最近流通している大麻は、含有成分が著しく増加しているとされ、大麻の有害作用については再評価する必要がある。大麻の有用性と有害作用を理解し、適切な大麻規制を考えるための論議を深めたい。

S7-1 米国における大麻規制の状況：医療用途と嗜好品

富山 健一 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部

S7-2 繊維型大麻草主成分カンナビジオールを応用した創薬基盤の確立に向けて

竹田 修三 広島国際大学薬学部環境毒物代謝学研究室

S7-3 大麻成分の有用性と危険性に関する研究

三島 健一 福岡大学薬学部生体機能制御学教室

S7-4 大麻成分の有害作用に関する研究：依存性と細胞毒性

船田 正彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

PTSDの新規予防法・治療法の開発—基礎から臨床へ—

Novel prevention and treatment of PTSD -from basic research to clinical trial-

オーガナイザー・座長：森信 繁 吉備国際大学保健医療福祉学部作業療法学科
座長：喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科

PTSD治療にはSSRIと持続暴露療法の併用が推奨されるが、本療法に抵抗性の症例も少なくなく、新たな予防・治療法の開発が望まれる。本シンポでは恐怖記憶というPTSDの中核症状を標的に、1) 外傷体験直後のレム睡眠調整による恐怖記憶の固定化を抑える予防法の開発、2) 恐怖記憶の忘却という再体験を必要としない新たな認知行動療法の開発のための基礎研究、3) 恐怖記憶の消去障害に対する脳局所刺激療法開発のためのPTSDモデルを用いた基礎研究、4) 恐怖記憶の消去を目的としたfMRIによるNeurofeedback治療の現状、を発表する。

S8-1 動物モデルによる睡眠中の恐怖記憶が固定化されるメカニズムの解明

坂口 昌徳 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構

S8-2 海馬神経新生エンハンサーを用いた恐怖記憶忘却方法の開発とPTSD治療方法開発への展望

福島 穂高 東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科

S8-3 化学遺伝学による内側前頭前野皮質の興奮性神経細胞の賦活は、PTSD動物モデルにおける恐怖記憶の消去障害を軽減する

淵上 学 広島大学病院精神科

S8-4 PTSDに対するneurofeedback治療法の開発

千葉 俊周 国際電気通信基礎技術研究所

グルタミン酸をKey分子とした精神疾患発症の新規メカニズム

Gender differences involved in glutamate in the mice central nervous system

オーガナイザー・座長：新田 淳美 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)・薬物治療学研究室
座長：照沼 美穂 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生化学分野

グルタミン酸は脳で非常に重要な神経伝達物質であることは周知のことである。その神経伝達機能の結果として、依存の発生、不安の惹起、認知記憶機能への貢献がなされ、生体が成り立っている。本シンポジウムでは、グルタミン酸または、その受容体やトランスポーターの障害が元でおこる依存形成や記憶認知障害に対する性差について、議論をする予定である。また、不安制御の新規メカニズムについても迫りたいと考えている。

S9-1 代謝型グルタミン酸受容体3を介した精神疾患関連メカニズムの検討

宇野 恭介 摂南大学薬学部機能形態学 / 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)薬物治療学研究室

S9-2 慢性ストレスとコカインがグルタミン酸-グルタミン回路に与える影響

嶋本 晶子 メハリー医科大学神経科学分野

S9-3 不安行動におけるカイニン酸型グルタミン酸受容体GluK3の役割

飯田 和泉 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生化学分野 / 新潟大学脳研究所モデル動物開発分野

JSNP

シン
ポ
ジ
ウ
ム

精神疾患における炎症状態を担うダメージ関連分子の役割

Roles of damage-associated molecules for inflammatory conditions in mental illnesses

オーガナイザー・座長：古屋敷智之
加藤 忠史

神戸大学大学院医学研究科薬理学分野
理化学研究所脳神経科学研究センター精神疾患動態研究チーム

臨床・基礎研究の両面から、精神疾患における炎症関連分子の関与が示唆されてきた。近年、動物モデルを用い、慢性ストレスによるうつ様行動や不安様行動などの情動変化にTLR2/4やNLRP3など自然免疫分子を介した脳内炎症反応が重要であることが示された。元来、自然免疫分子は微生物の分子パターンを認識する分子群として同定されたが、近年ダメージ関連分子と称する様々な内在性物質が自然免疫分子を活性化し、非感染性炎症を惹起することが提唱されている。ダメージ関連分子は循環器疾患や代謝疾患など他の炎症疾患にも関与しており、精神疾患におけるダメージ関連分子の働きが他の炎症疾患のリスクを高める可能性も考えられる。そこで本シンポジウムでは、精神疾患や他の炎症疾患のダメージ関連分子研究を一堂に会し、精神疾患における炎症状態を担うダメージ関連分子の役割やダメージ関連分子を標的とした精神疾患創薬の有効性を議論したい。

S10-1 脳障害の鍵分子としての HMGB1：脳卒中、脳外傷からてんかんまで

西堀 正洋 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科薬理学分野

S10-2 心不全無菌性炎症惹起機構におけるミトコンドリア品質制御の役割

大津 欣也 キングスカレッジロンドン循環器科

S10-3 精神疾患の病態にDAMPsは関与するのか？

岩田 正明 鳥取大学医学部脳神経医科学講座精神行動医学分野

S10-4 社会ストレスでの自然免疫受容体TLR2/4を介した脳内炎症とダメージ関連分子の関与

古屋敷智之 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

統合失調症薬物療法の多様な課題にどう対応するか

Psychopharmacological strategies for various clinical issues in schizophrenia

オーガナイザー・座長：矢部 博興 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
座長：堀口 淳 島根大学医学部免疫精神神経学共同研究講座

統合失調症は不均一 heterogeneousな疾患であり、症候や状態像、治療反応、経過は様々に異なる。近年、メタ解析等により抗精神病薬の有効性・忍容性に関するエビデンスは集積されてきているが、病期や状態などによってどのように薬物療法を組み立てていくかは異なり、抗精神病薬を中心とした薬剤選択やその使用方法が重要となる。本シンポジウムでは統合失調症治療において臨床的に問題となることの多い場面や課題を取り上げ、どのような治療戦略を立てていくべきかを解説・議論する。

- S11-1 初発精神病性障害：改善後の維持療法をどうするか
松田 勇紀 東京慈恵会医科大学精神医学講座
- S11-2 統合失調症維持期の薬物療法
三浦 至 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
- S11-3 治療抵抗性統合失調症に対する治療戦略：clozapine抵抗性を含めて
嶽北 佳輝 関西医科大学精神神経科学教室
- S11-4 ドパミン過感受性精神病(DSP)の病態とその対応
高瀬 正幸 千葉大学大学院医学研究院精神医学

ADHDの薬物療法と非薬物療法 Treatments for persons with ADHD

オーガナイザー・座長：岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
座長：小野 和哉 聖マリアンナ医科大学精神医学講座

近年、児童思春期に加えて成人期における発達障害は、精神医学の領域においても、さらには社会的にも大きな注目を集めている。中でもADHDは成人期の精神疾患でもっとも高い有病率も持つ疾患の一つであり、薬物療法の効果が明らかであるにもかかわらず、十分な治療体制が整っているとは言えないのが現状である。このシンポジウムにおいては、小児期および成人期におけるADHDの薬物療法、非薬物療法について、現状と問題点について検討を行うことを目的としている。ADHD治療薬の効果および副作用と使い分け、年代など臨床的な要因との関連、気分障害、ASDなどの併存疾患がある場合の対処方法、薬物療法と非薬物療法の適応などについて論じる予定である。

S12-1 子どものADHDの薬物療法

横山富士男 埼玉医科大学医学部精神医学

S12-2 成人期ADHD診療における薬物療法 —治療の全体構造の中での薬物の役割—

松岡 孝裕 埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科 / 埼玉医科大学国際医療センター精神科救命救急科

S12-3 成人期ADHDに対するGuanfacineの効果

岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座

S12-4 ADHDの非薬物療法

小野 和哉 聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室

情動行動の分子基盤

Molecular mechanisms of emotional behaviors

オーガナイザー・座長：山田 清文 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・附属病院薬剤部
座長：喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻

快・不快、恐怖、不安などの情動には、大脳基底核、扁桃体、海馬、大脳皮質等が関与する。また、情動行動の障害は様々な神経精神疾患と深く関わっていることが知られている。これら情動の制御について特有の神経核、神経回路が同定されているが、神経回路の動作原理や再編を制御するメカニズムは殆どわかっていない。本シンポジウムでは我が国を代表とする4名のシンポジストが集い、最先端の技術を駆使して情動行動がどのようなメカニズムで制御されているのかを議論する。

S13-1 報酬行動の分子基盤 ～ ICSSを用いた報酬メカニズムの解析～

井手聡一郎 東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

S13-2 恐怖記憶再固定化と消去に対する海馬の役割と記憶制御の分子機構

喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻

S13-3 快・不快情動の細胞内シグナル

永井 拓 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・附属病院薬剤部

S13-4 情動行動におけるセロトニン神経の役割

永安 一樹 京都大学大学院薬学研究科生体機能解析学分野

回路操作による症候の発現モデルと創薬への応用

Symptomatic animal models by circuit manipulation and their application to drug development

オーガナイザー・座長：須原 哲也 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所
南本 敬史 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所

近年、光遺伝学や化学遺伝学の手法を使った神経回路操作により、情動や意思決定とその障害に関連する回路機能の解析が広く行われている。このようにして作られた動物はまた創薬領域においても大きな潜在的価値があると考えられるが、その利用についてまだ十分な検討がなされているとは言えない。本シンポジウムでは特定の神経回路を操作することによって精神・神経疾患の症候に関連する機能の分子・回路メカニズムを明らかにする取り組みとともに、その実験系をどのように創薬に応用していくかを議論したい。また精神・神経疾患の症候をどのように動物で再現させるかに関しては、齧歯類からの検討に加えて霊長類を用いた場合の利点や困難さも含めて幅広い観点からの議論を行いたい。

S14-1 依存症における意思決定異常と島皮質GABA神経

溝口 博之 名古屋大学環境医学研究所次世代創薬研究センター

S14-2 セロトニン神経系の光操作と精神疾患治療への応用の可能性

宮崎 勝彦 沖縄科学技術大学院大学神経計算ユニット

S14-3 All That Glitters Is Not Gold, All That Oscillates Is Not Causal: A Reappraisal of the Role Network Oscillations Play in Parkinsonism

Kevin W. McCairn RIKEN Center for Biosystems Dynamics, Japan

S14-4 Chemogenetic functional imaging & electrophysiology: 脳局所干渉による大域ネットワーク作動変容のマルチスケール解析

平林 敏行 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構

創薬と神経画像研究

Drug discovery and neuroimaging

オーガナイザー：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座
 座長：高橋 琢哉 横浜市立大学生理学
 小高 文聡 東京慈恵会医科大学精神医学講座

ポジトロン断層法(Positron emission tomography : PET)は、種差を超え標的分子の動態を探索できる重要な神経画像モダリティである。その特性上、PETは基礎から臨床に至るすべての創薬フェーズにおいて重要な役割を果たしているが、向精神薬の創薬では対象となる精神疾患の異質性(heterogeneity)の問題から、単一の標的分子を評価し、相補的に機能的MRIなどの他の核磁気共鳴技術による層別化や、治療有効性の評価も期待されている。本シンポジウムでは、PETを軸とした代表的な創薬フェーズ、すなわち1)基礎研究からのPETトレーサー開発、2)PETを用いたヒトにおける標的分子の評価、3)PETを用いた産学連携による創薬促進、4)PET以外の画像モダリティによる治療有効性評価の試みをテーマに、創薬と神経画像研究にかかわる最近の知見を紹介する。

S15-1 シナプス可塑性：基礎から臨床へ

高橋 琢哉 横浜市立大学医学部生理学

S15-2 PETを用いた中枢神経系の医薬品の開発

高野 晴成 国立精神・神経医療研究センター脳病態統合イメージングセンター

**S15-3 ニューロイメージングバイオマーカーを用いた創薬：
量子イメージング創薬アライアンスの取り組み**

高畑 圭輔 量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S15-4 安静時機能的MRIを用いた、統合失調症の治療維持期における抗精神病薬の至適用量

小高 文聡 東京慈恵会医科大学精神医学講座

”仮想”新薬開発会議：シグマアンタゴニストの開発戦略を議論する

A virtual R&D meeting on a sigma antagonist

オーガナイザー・座長：石郷岡 純 CNS薬理研究所
座長：中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

有用性の高い新薬の開発を行うためには、シーズの特性、アンメットニーズの的確な把握、ゴールを目指した適切な開発戦略のベストマッチが必要である。しかし、現実の開発では、必ずしもこれらの要素を一貫性をもって計画されてきたとは言えない面がある。その理由の一つとして、開発戦略構築の初期段階で産と学の意見交換が十分行われてこなかった点があげられる。そこで、本企画では、シグマアンタゴニストの開発を題材にして、開発の最初期段階を想定した”仮想の”開発戦略会議という形式で、産・学それぞれが忌憚なく意見を交換する場としたい。

S16-1 シグマアンタゴニストNE-100の非臨床試験

茶木 茂之 大正製薬(株)医薬研究本部
橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター

S16-2 σ 1受容体アンタゴニストNE-100の開発

森尾 保徳 国立精神・神経医療研究センター
住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター

S16-3 発展的精神科医療を目指した σ 1受容体アンタゴニスト NE-100の開発戦略

中村 洋 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部
渡邊衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

指定討論者 中林 哲夫 医薬品医療機器総合機構

指定討論者 山田 光彦 国立精神・神経医療研究センター

精神神経疾患へのTMSと期待される可能性

A Future Perspective on TMS as Neuromodulation for Psychiatric Disorders

オーガナイザー・座長：鬼頭 伸輔 東京慈恵会医科大学精神医学講座
座長：野田 賀大 慶應義塾大学医学部精神神経科学講座

2017年9月、わが国でも反復経頭蓋磁気刺激 (repetitive transcranial magnetic stimulation, rTMS) が治療抵抗性うつ病への治療法として承認された。本シンポジウムでは、いまだ国内では研究段階であるが、今後、臨床応用が期待される領域について論じる。初めに、自閉スペクトラム症の病態生理に着目したrTMSの臨床応用の可能性について論じる。双極性障害抑うつエピソードは国内外未承認であるが、わが国で先進医療制度を利用した世界初の検証的試験を試みる。その概要を報告する。米国では、2018年8月、intermittent theta burst (iTBS) が治療抵抗性うつ病への治療法として認可された。そのエビデンスとなった臨床研究について概説する。2018年8月、強迫性障害への新規治療法としてdeep TMS (dTMS) が米国で認可された。その可能性について論じる。

S17-1 自閉スペクトラム症への新しいアプローチ：rTMSの有用性と病態解明のための磁気刺激-脳波同時測定(transcranial magnetic stimulation - electroencephalogram: TMS-EEG)研究

増田 史 慶應義塾大学医学部精神神経科

S17-2 薬物療法に反応しない双極性障害抑うつエピソードへの反復経頭蓋磁気刺激の有効性と安全性：無作為化二重盲検並行群間比較試験

鬼頭 伸輔 東京慈恵会医科大学精神医学講座

S17-3 治療抵抗性うつ病へのiTBSの有効性と安全性－THREE-D試験の結果から－

野田 賀大 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S17-4 治療抵抗性強迫症へのdTMSの有効性と安全性

中前 貴 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学

情動のレギュレーターとしての内感覚情報

Visceral and interoceptive information shapes emotional experience

オーガナイザー・座長：加藤 総夫 東京慈恵会医科大学神経科学研究部
座長：松岡 豊 国立がん研究センター社会と健康研究センター

情動の形成には、感覚、記憶、認知などの多様な因子が関与しているが、その形成においておそらくは極めて重要な役割を果たしているのが内環境情報である可能性は、従来の多くの研究により示唆されてきたが、近年の脳機能画像化および人工的神経活動操作法などによってその生物学的実体が明らかにされつつある。本シンポジウムでは、ヒトとモデル動物を対象にしてこの問題に挑む研究者を2名ずつ集め、特に、扁桃体、島皮質、などを中心とした内感覚情報・内臓感覚などによって活性化される脳活動に関与する神経解剖学・生理学的基盤を明らかにするとともに、その知見を基にした臨床における介入について最新のデータを紹介するとともに論じる。

- S18-1** 内環境情報伝送経路としての腕傍核－扁桃体路の意義
加藤 総夫 東京慈恵会医科大学医学部神経科学研究部
- S18-2** 情動を支える自律神経機能と内受容感覚
梅田 聡 慶應義塾大学文学部心理学研究室
- S18-3** 脳－肝軸：転写因子PPAR γ の肝臓発現は迷走神経を介して高脂肪食誘発不安様行動をレギュレートする
関口 正幸 国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第4部
- S18-4** 栄養成分オメガ3系脂肪酸と不安症状
松岡 豊 国立がん研究センター社会と健康研究センター健康支援研究部

「自閉症スペクトラム症の病態仮説」と治療戦略

Pathological possibilities in autism spectrum disorder; relation to therapy

オーガナイザー・座長：油井 邦雄 藤田医科大医学部腎泌尿器外科学講座
座長：橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター

近年、自閉症スペクトラム症(ASD)の病態研究と治療戦略が大幅に進展してきた。ASDは複合的病態による発達障害とされ、その基盤に遺伝子の異常が想定されているが、脳機能の発達過程でのシグナリングの偏倚が病態を生成していることは周知の事実である。本シンポジウムでは現時点で提示されている各様の病態仮説とそれに基づく治療戦略を提示し、今後のASD治療を検討したい。

S19-1 自閉症スペクトラム症の病態仮説と治療戦略への展望

油井 邦雄 藤田医科大学医学部腎泌尿器外科学講座(結節性硬化症ボード)

S19-2 自閉スペクトラム症に対する抗酸化剤N-acetylcysteineの予防効果の可能性：環境刺激の観点から見た病態解明と予防戦略

小野田淳人 名古屋大学医学部小児科 / 日本学術振興会特別研究員PD

S19-3 脳発達と社会性行動におけるアストロサイトCD38の役割

服部 剛志 金沢大学医薬保健研究域医学系神経解剖学

S19-4 CHD8変異マウスにおけるASD発症メカニズム

片山 雄太 九州大学生体防御医学研究所分子医科学分野

指定討論者 橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター病態解析研究部門

オピオイド適正使用に向けた薬剤師の取り組み

Approach to appropriate use of opioids by pharmacists

オーガナイザー・座長：中川 貴之 京都大学医学部附属病院薬剤部
座長：高瀬 久光 日本医科大学多摩永山病院薬剤部

近年、米国ではオピオイドの不適正使用(乱用・麻薬依存)が蔓延し、2015年にはオピオイド過量摂取による死亡者が3.3万人を越えるなど、大変深刻な事態となった(オピオイドクライシス)。幸い国内ではそのような事態には陥っていないが、オピオイドの慢性痛への適応拡大が進む中、一層、オピオイド適正使用に向けた取り組みが求められる。本シンポジウムでは、オピオイドの適正使用に焦点をあて、米国オピオイドクライシスや国内でのオピオイド適正使用の現状について医師からお話し頂いた後、がん患者におけるオピオイドを含むポリファーマシーと薬剤師介入による減処方現状とその効果に関する全国アンケート調査、および前向き観察研究の結果を報告するとともに、医薬品副作用データベース解析によるオピオイドの副作用、特に呼吸抑制や死亡といった重篤な副作用の変遷の解析結果などを報告する。オピオイド乱用や依存に興味を持つ薬剤師の本学会への参入の一助になればと考えている。

S20-1 痛み治療におけるオピオイド鎮痛薬の位置づけを考える
～オピオイド鎮痛薬を適切に使用するために～

上野 博司 京都府立医科大学附属病院疼痛緩和医療部

S20-2 緩和ケア領域におけるポリファーマシーの現状と病院/薬局薬剤師の介入実態に関する
全国アンケート調査

中川 貴之 京都大学医学部附属病院薬剤部

S20-3 緩和医療におけるポリファーマシーに対する薬剤師の介入に関する多施設前向き観察研究

内田まよこ 大阪薬科大学臨床薬学教育研究センター

S20-4 我が国の大規模医薬品副作用データベースJADERに基づくオピオイド関連有害事象の解析

菅原 英輝 鹿児島大学病院薬剤部

抑肝散だけではない、認知症の行動・心理症状(BPSD)に対する漢方薬

Kampo medicine other than yokukansan for behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD)

オーガナイザー・座長：山田 和男 東北医科薬科大学病院精神科
座長：岩崎 克典 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

認知症の行動・心理症状(BPSD)に対する漢方治療としては抑肝散が有名であるが、実際の臨床場面では、それ以外の漢方薬が奏効することも多い。そもそも抑肝散は、BPSDのうちの興奮関連症状には奏効するが、不眠やアパシー、食欲不振などに対してはほとんど効果がない。認知症の不眠に対しては、抑肝散よりも酸棗仁湯が有効である場合が多い。また、認知症のアパシーや食欲不振に対しては、人参養栄湯が奏効することが多い。その他、漢方専門医たちは、さまざまな漢方薬を漢方医学的な“証”に応じて使い分けている。本シンポジウムでは、これらの漢方薬のうち、酸棗仁湯と人参養栄湯の認知症のBPSDへの効果について、基礎・臨床の両面からの知見を紹介するとともに、認知症治療における漢方薬の役割について議論する予定である。認知症のBPSDに対する酸棗仁湯と人参養栄湯の効果に関して、基礎・臨床の両面から切り込んでいきたい。

- S21-1** 認知症高齢者と漢方：
アルツハイマー型認知症患者の食欲不振やアパシーに対する人参養栄湯の効果
大澤 誠 大井戸診療所
- S21-2** 人参養栄湯の神経薬理学的作用機構—ドーパミン神経系を中心に—
大宮 雄司 株式会社ツムラ漢方研究開発本部ツムラ漢方研究所
- S21-3** 酸棗仁湯に関する臨床医学的な知見
宮岡 剛 医療法人青葉会松江青葉病院
- S21-4** アルツハイマー型認知症患者の睡眠障害に対する酸棗仁湯の効果—モデル動物を用いた研究—
岩崎 克典 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

統合失調症とその関連疾患のエンドフェノタイプ

Pathway from divergent etiologies to convergent endophenotypes in schizophrenia

オーガナイザー・座長：宮川 剛

藤田医科大学総合医科学研究所

座長：Robert McCullumsmith

Department of Neuroscience, University of Toledo, USA

統合失調症や双極性障害などの精神疾患では、多種多様な遺伝的要因と環境要因が危険因子となっていると考えられている。個々の患者が独自の遺伝子多型・変異のセットと各種ライフイベントや感染・炎症などの経験のユニークな組み合わせを有している一方で、それが共通の症状に帰結するわけだが、この間には患者間で共有される何らかの共通の病態が存在するはずである。近年の研究から、そのような脳内の「中間表現型」の候補として、シナプスの異常、細胞の成熟度異常、領域間結合の異常、慢性炎症などが挙げられている。では、多様な病因のセットから中間表現型に至るパスウェイに何らかの原理・原則は存在するのだろうか？本シンポジウムでは、3名の演者が神経回路の過剰興奮やエネルギー代謝異常に焦点を当てた講演を行う。さらに、その道筋を統一的に理解できる仮説を構築することが可能かどうかについて議論を行う。

S22-1 神経過活動によって誘導される未成熟様の遺伝子発現パターンは複数の精神神経疾患に共通してみられる

村野 友幸 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学部門

S22-2 精神疾患のエンドフェノタイプとしての脳神経細胞の機能的成熟の異常

小林 克典 日本医科大学薬理学

S22-3 Bioenergetic defects in severe mental illness: identification of novel etiologies that may be targeted with repurposed drugs

Robert McCullumsmith Department of Neurosciences, University of Toledo, Toledo, OH, USA

指定討論者 松本 光之 アステラス製薬株式会社

分子イメージングを用いた向精神薬評価の新たな展開
Update in molecular imaging of psychotropic drugs

オーガナイザー・座長：大久保善朗 日本医科大学大学院精神行動医学
座長：須原 哲也 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所

Positron Emission Tomography (PET) は、ポジトロン放出核種で標識した各種の化合物をプローブとして生体に投与し、その経時的な動態や体内分布を体外から計測する分子イメージング技術である。PETを用いて向精神薬の評価する際には、生体内で調査対象薬剤が受容体やトランスポーターに結合している程度をPETトレーサーの特異結合の減少の程度、すなわち、占有率として指標にする方法が用いられる。ドパミンD2受容体占有率を指標にした抗精神病薬の至適用量の設定など、これまでに大きな成果をあげてきた。本シンポジウムでは、分子イメージングを用いた向精神薬評価研究の最新の動向として、セロトニントランスポーター、ノルエピネフィリントランスポーターそしてドパミンD2,D3受容占有率を指標にした抗うつ薬または抗精神病薬の評価研究を紹介する。

S23-1 セロトニントランスポーター占有率による抗うつ薬の評価

荒川 亮介 カロリンスカ研究所臨床神経科学部門 / 日本医科大学精神医学教室

S23-2 分子イメージングバイオマーカーに基づく新しい治療選択：
プレシジョンメディスンの実現に向けて

高畑 圭輔 量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S23-3 ドパミンD₂ならびにD₃受容体占有率を指標とした抗精神病薬の作用評価

館野 周 日本医科大学精神医学

日本神経精神薬理学会 学術奨励賞受賞講演

NP学術奨励賞受賞講演

10月13日(日) 8:20 ~ 10:20 第15会場(福岡サンパレスホテル&ホール 2F パレスルームB)

座長：大森 哲郎 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野

NEN1

精神疾患の中間表現型を用いたゲノム研究

大井 一高 岐阜大学大学院医学系研究科精神病理学

NEN2

恐怖記憶が長期間持続する神経回路機構の解明

野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

JSNP

学術奨励賞受賞講演

一般演題 (口演)

口演1

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第8会場(404)

認知症、神経科学

座長： 糸川 昌成 公益財団法人東京都医学総合研究所
猿渡 淳二 熊本大学大学院生命科学研究部薬物治療学分野

O1-1 中枢ヒスタミンによる記憶の想起障害の改善

野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

O1-2 APC-100、低分子化合物によるアルツハイマー病の神経再生治療薬

菅谷 公伸 中央フロリダ大学医学部

O1-3 パーキンソン病患者 iPS 細胞由来 GABA 神経細胞を用いたパーキンソン病の病態解析

香川 玲子 星薬科大学薬理学研究室

O1-4 ラット脳膜標品における³⁵S]GTP γ S binding/immunoprecipitation assayの再確立

小田垣雄二 埼玉医科大学医学部

O1-5 集団飼育ホームケージ内におけるFMR1欠損マウスの自閉スペクトラム症様行動表現型

ベナー 聖子 浜松医科大学医学部精神医学講座

O1-6 プロテオミクスが解き明かす自閉症スペクトラム障害とてんかんに共通する分子病態基盤

坪井 大輔 名古屋大学大学院医学系研究科神経情報薬理学講座

O1-7 ドーパミン生成能と、ドーパミン再取り込み機能およびドーパミンD₂受容体密度との関連性に関する検討

山本 保天 量子科学技術研究開発機構量子医学・医療部門放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 / 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

口演2

10月12日(土) 10:30 ~ 12:10 第8会場(404)

統合失調症関連

座長： 奥川 学 関西記念病院
池田 和仁 大日本住友製薬株式会社

O2-1 行動変容への意思決定理論的なアプローチ

松森嘉織好 玉川大学脳科学研究所

O2-2 統合失調症の精神刺激薬動物モデルでは、末梢血液で複数の免疫・炎症因子の異常が認められる

伊藤 侯輝 北海道大学病院精神科神経科

O2-3 Electronic adherence monitoring (EAM)で測定した統合失調症の服薬アドヒアランス：システムティックレビューとメタアナリシス

八重樫穂高 山梨県立北病院

O2-4 日本人を対象とした実臨床データ及びメタアナリシスに基づく非定型抗精神病薬の治療戦略に関する費用対効果評価

村田 篤信 慧真会協和病院薬剤科

O2-5 精神科専門研修における抗精神病薬処方適正化の教育方法について

市橋 香代 東京大学医学部附属病院精神神経科

JSNP

一般演題 (口演)

O2-6

統合失調症におけるクロザピン治療と抗精神病薬単剤治療の関連
～EGUIDEプロジェクトの処方調査の結果から～

長谷川尚美 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

O2-7

クロザピン抵抗性の統合失調症に修正型電気けいれん療法の併用が有効であった一例。

白土 俊明 社会医療法人如月会若草病院

□演3

10月13日(日) 8:40～10:20 第10会場(406)

双極性障害、神経科学

座長： 辻野 尚久 東邦大学医学部精神神経医学講座
梶井 靖 武田薬品工業T-CiRAディスカバリー

O3-1

演題取り下げ

O3-2

精神神経疾患のトランスレーショナル研究ツールとしてのiMG(induced microglia-like)細胞

扇谷 昌宏 九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野

O3-3

治療抵抗性統合失調症の自閉症的特性とオキシトシン系システム障害：
寛解統合失調症および自閉症スペクトラム障害との神経心理学的・遺伝学的比較検討

仲田 祐介 千葉大学医学部医学研究院精神医学

O3-4

大脳白質の成熟性と社会機能の指標である労働時間との関連

松本 純弥 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

O3-5

双極性障害では線条体におけるホスホジエステラーゼ10Aの密度が低下する

佐野 康徳 量子科学技術研究開発機構量子医学・医療部門放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

O3-6

双極性障害患者における血清中エタノールアミンプラズマローゲンおよび
ホスファチジルエタノールアミン濃度の変化

小川真太郎 国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部

O3-7

バルプロ酸投与中の双極性障害患者におけるカルニチン欠乏症について

石井沙安也 獨協医科大学病院精神神経科学講座

JSNP

一般演題(口演)

ポスター発表

10月12日(土) 17:25 ~ 18:10 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)
10月13日(日) 16:40 ~ 18:10 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)

ポスター1 うつ病、神経科学

10月12日(土) 17:25 ~ 18:10

座長： 前原 俊介 持田製薬株式会社

- P1-1 うつ病モデル動物：嗅球摘出ラットの行動変化におけるアデノシンA1受容体作動薬 N6-シクロペンチルアデノシンの作用
後藤 玲央 福岡大学医学部精神医学教室ニューロサイエンス・精神医学研究講座 / 福岡大学医学部精神医学教室
- P1-2 うつ病モデル動物における扁桃体FKBP5の発現様式
鹿内 浩樹 北海道医療大学薬学部薬理学講座
- P1-3 幼若期薬理学的ストレス負荷による成長後の抑うつ様行動に対する選択的セロトニン再取り込み阻害薬フルボキサミンの効果
新地 瑠海 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室
- P1-4 慢性痛モデルマウスにおけるレゾルビンD1およびレゾルビンD2の抗うつ効果
鈴木 博恵 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P1-5 Shati/Nat8l線条体局所的ノックダウンマウスにおけるBdnf遺伝子のアセチル化制御を介したうつ病発症に対する抵抗性の形成
宮西 肇 富山大学大学院医学薬学研究部薬物治療学研究室

ポスター2 双極性障害、うつ病

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長： 内野 茂夫 帝京大学理工学部バイオサイエンス学科

- P2-1 マウス前頭前皮質におけるTeneurin-4の発現減少によるうつ行動への関与
所 一輝 富山大学医学薬学教育部薬物治療学研究室
- P2-2 双極性障害の病態メカニズム解明に向けてのTeneurin-4の機能解析研究
中野 史崇 富山大学薬学部薬物治療学研究室
- P2-3 学習性無力ラットにおけるグルタミン酸トランスポーターとグルタミン合成酵素
吉野 晃平 千葉大学大学院医学研究院精神医学
- P2-4 脳由来神経栄養因子(BDNF)遺伝子多型と人格特性および不安特性における関連研究
鈴木 玖実 麻布大学大学院環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野
- P2-5 新生仔期MK-801慢性投与によるNMDA受容体遮断はラットの摂餌行動における社会的促進を障害する
古家 宏樹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部

JSNP

一般演題
(ポスター)

座長： 永安 一樹 京都大学大学院薬学研究科

- P3-1** 骨基質蛋白質オステオポンチン誘導物質の覚醒剤依存形成への影響
 中島 卓海 富山大学医学薬学教育部薬物治療学研究室
- P3-2** メタンフェタミン退薬後の認知機能障害発現における内因性カンナビノイドシステムの関与
 福森 良 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室
- P3-3** 内側前頭前皮質から中脳水道周囲灰白質への神経投射は葛藤環境における報酬探索行動を促進する。
 本宿 雄基 北海道大学薬学部薬理学分野
- P3-4** 日本人におけるドーパミンD2受容体遺伝子とアルコール依存症との関連研究
 戸上 樹音 麻布大学大学院環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野
- P3-5** 日本人におけるoxytocin receptor遺伝子多型とアルコール依存症との関連研究
 宮本真起子 麻布大学環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野

座長： 野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

- P4-1** アルツハイマー病患者の脳内で発現が減少するアミノ酸 N-acetyl-aspartate (NAA) がマウス由来アストロサイトにおいてニコチン性アセチルコリン受容体 $\alpha 7$ サブユニットの発現に与える影響
 楠井 優香 富山大学医学薬学教育部薬科学専攻薬物治療学研究室
- P4-2** 老化制御転写因子 Foxo3a とレビー小体病病因遺伝子 α -synucleinを用いた早期老化による認知症モデルマウスの作成
 王 帆 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)・薬物治療研究室
- P4-3** チペピジンはアルツハイマー病モデルマウスの空間認知機能障害を顕著に改善する
 高濱 和夫 熊本保健科学大学
- P4-4** 脳虚血および β -amyloid誘発認知症モデル動物の行動・心理様行動に対する発酵オタネニンジンの効果
 長尾 昌紀 福岡大学加齢脳科学研究所
- P4-5** マウス前頭前皮質における Shati/Nat8l 発現量変化の空間認識機能への関与
 東 克憲 富山大学薬学部薬物治療学研究室

座長： 辻 稔 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野

- P5-1** マウスにおける意思決定の客観的及び定量的解析
 鈴木 健 早稲田大学大学院人間科学研究科環境脳科学研究室 / 早稲田大学環境医学研究所
- P5-2** Appノックインマウスにおける認知機能の時系列変化の評価
 城宝 大輔 早稲田大学大学院人間科学研究科環境脳科学研究室 / 早稲田大学環境医学研究所
- P5-3** オキシトシン点鼻投与は側坐核 dopamine D1 受容体陽性中型有棘神経細胞を活性化させる
 田中 謙一 星薬科大学薬理学研究室

- P5-4** 織毛病関連遺伝子を破壊する変異を持つhTERT-RPE1細胞におけるGタンパク共役型受容体の織毛局在
三好 耕 大阪大学連合小児発達学研究所分子生物遺伝学研究領域 / 大阪大学連合小児発達学研究所子どものこころの分子統御機構研究センター
- P5-5** 女神散は卵巣摘出による運動量の低下を改善する
古川 恵 横浜薬科大学薬学教育センター
- P5-6** D-ニューロン(トレースアミンニューロン1型)の細胞組織化学の普遍化は急務である
池本 桂子 いわき市医療センター精神科(リエゾン科)

ポスター 6 統合失調症

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長：池本 桂子 いわき市医療センター

- P6-1** 統合失調症治療に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDEプロジェクト)の効果：報告1-過去2年の受講者のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察—
山田 恒 兵庫医科大学精神科神経科学講座 / 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部
- P6-2** 統合失調症に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDEプロジェクト)の効果：報告2-過去2年の参加施設のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察—
本山美久仁 兵庫医科大学精神科神経科学講座
- P6-3** 統合失調症の現在IQ・病前IQより推定する知的機能低下: Schizophrenia Non-Affected Relative Project (SNARP)
大井 一高 金沢医科大学精神神経科学 / 金沢医科大学総合医学研究所
- P6-4** 統合失調症患者と非罹患第1度近親者の社会機能障害
嶋田 貴充 金沢医科大学精神神経科学 / 岡部病院
- P6-5** 統合失調症患者、非罹患第1度近親者および健常者間の遂行機能の差異について
片岡 譲 金沢医科大学医学部精神神経科学

ポスター 7 ADHD、抗精神病薬

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長：河原 幸江 久留米大学医学部薬理学講座

- P7-1** 認知的柔軟性の顕在的・潜在的側面と安静時脳活動について
藤野 純也 昭和大学発達障害医療研究所 / 京都大学大学院医学研究科精神医学教室
- P7-2** 日本における成人の注意欠如・多動症患者に対するグアンファシン徐放錠の有効性と安全性：フェーズ3ランダム化二重盲検プラセボ対照試験
岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
- P7-3** 日本における成人の注意欠如・多動症患者に対するグアンファシン徐放錠の安全性と有効性：フェーズ3オープンラベル長期投与試験
岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
- P7-4** Blonanserinテープ製剤の血漿中薬物濃度と脳内ドパミンD₂受容体占有率—実臨床を想定したシミュレーション—
北村 敦 大日本住友製薬株式会社開発本部臨床企画部
- P7-5** ロナセンテープの製剤設計
田中 雅康 大日本住友製薬株式会社技術研究本部製剤研究所

JSNP

一般演題
(ポスター)

座長： 鶴飼 渉 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

- P8-1** 神経過活動によって誘導される未成熟様の遺伝子発現パターンは複数の精神神経疾患に共通してみられる
村野 友幸 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学部門
- P8-2** メタンフェタミン反復投与による統合失調症病態モデル動物におけるNMDA受容体の構成パターンに着目した病態研究
岡 松彦 北海道大学大学院医学研究院
- P8-3** 向精神薬の行動学試験に用いられるvehicle自体の攻撃行動抑制作用：DMSOとオリーブオイルに潜む危険
口岩 俊子 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科形態科学 / 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科心理臨床学
- P8-4** マウス・ラット用新規小型全自動薬液投与デバイスの開発
遠藤 俊裕 フェノバンス・リサーチ・アンド・テクノロジー合同会社 / 筑波大学 医学医療系
- P8-5** 幼若期マウスにおける集団飼育ホームケージ環境下全自動認知行動試験法の確立
遠藤 俊裕 フェノバンス・リサーチ・アンド・テクノロジー合同会社 / 筑波大学医学医療系

座長： 池田 弘子 星薬科大学薬物治療学研究室

- P9-1** 慢性社会的挫折ストレスモデルマウスにおいて乳酸産生阻害剤の投与は不安様行動を悪化させる
萩原 英雄 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学研究部門
- P9-2** 社会的敗北ストレス負荷マウスを用いたリルゾールの抗ストレス効果についての検討
石井 香織 東京理科大学薬学部薬学科疾患薬理学研究室 / 国立精神・医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部
- P9-3** 慢性ストレスによる背外側分界条床核神経伝達の可塑的变化
原 隆人 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P9-4** D-セリン制御と神経新生抑制による遠隔恐怖記憶の消去
井上 蘭 富山大学大学院医学薬学研究部分子神経科学講座
- P9-5** 慢性痛による拡張扁桃体神経回路の可塑的变化は不安を惹起する
山内 直紀 北海道大学大学院薬学研究科薬理学研究室

座長： 戸田 重誠 昭和大学医学部精神医学講座

- P10-1** 背外側分界条床核へ投射する扁桃体中心核神経細胞における神経ペプチドmRNAの組織学的発現解析
新垣 紗也 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P10-2** ヒスタミンH1受容体拮抗薬処置マウスにおけるタッチスクリーン型5-選択反応時間課題を用いた注意機能の評価
廖 婧竹 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学

P10-3

IPS細胞を用いた神経発達障害の分子病態の解明

豊島 学 理化学研究所脳神経科学研究センター分子精神遺伝研究チーム

P10-4

自閉スペクトラム症病態モデルマウスにおける探索・情動・社会性行動解析

清水 仁美 帝京大学理工学部バイオサイエンス学科

P10-5

オレキシン2型受容体選択的作動薬TAK-925は、マウス及び霊長類において覚醒を誘導し、ナルコレプシーモデルマウスの症状を改善する

木村 温英 武田薬品工業株式会社リサーチニューロサイエンス創薬ユニット

ポスター 11 抗精神病薬

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長： 小田垣雄二 埼玉医科大学医学部神経精神科・心療内科

P11-1

急性増悪期の統合失調症患者を対象としたルラシドンの6週間プラセボ対照二重盲検並行群間比較による第3相検証的試験 (JEWEL試験) の成績

伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学

P11-2

演題取り下げ

P11-3

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした検証的試験 (ELEVATE試験) の成績 (有効性)

加藤 忠史 理化学研究所脳神経科学研究センター精神疾患動態研究チーム

P11-4

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした検証的試験 (ELEVATE試験) の成績 (安全性/忍容性)

樋口 輝彦 日本うつ病センター / 国立精神・神経医療研究センター

P11-5

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした長期投与試験 (ELEVATE継続投与試験) の成績

石郷岡 純 CNS薬理研究所

JSNP

一般演題
(ポスター)